

埼玉県特別支援教育研究会

(第5分科会) 特別支援学級の授業づくり入門

発達差と学年差がある 特別支援学級の授業づくり



令和4年8月3日(水)

埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

教授 長江 清和

Ⅰ 特別支援学級で 行われた授業研究の実際



特別支援教育が大切にしている 授業づくりのポイント（長江）

- ①「わかる・できる」ためのプロセスを踏
まえたスモールステップの指導と評価
- ②「わかる・できる」ための教材・教具の
活用（提示の仕方等を含む）
- ③視覚化と構造化を生かした授業づくり
- ④学び合いのための人間関係づくり
（ソーシャルスキルを含む）



①-a スモールステップ
「カラーロープで遊ぼう」
(体育)



スモールステップの指導と評価のために (チェック表の活用)

(7) ロープを使った運動 (這う・くぐる運動) *

教師と友達が張ったロープの下を、引っかからないように身体を操作して這ってくぐることができる。	A	B	C	D	E	F
・友達が這ってくぐることを意識して、ロープを持って張ることができる。*	○	○	○	○	○	○
・腕を伸ばしてひきつける力だけで、足を使わずに這ってくぐることができる。*	◎	◎	◎	◎	◎	◎
・腕の引きつけと片方の足のけりを使って這ってくぐることができる。*	◎	◎	◎	◎	◎	◎
・腕の引きつけと両足のけりを使って這ってくぐることができる。*	△	○	△	◎	◎	○
・体の交叉パターンと足の親指のけりを使って、円滑な動作で這ってくぐることができる。*	△	△	△	○	○	○

①-b スモールステップ
「コロコロドッチボール」
(体育)



「わかる」「できる」ために (場の状況の把握につながる認知の支援)

①ボールを転がす目標

(鉄棒の支柱の間《立体》→ラインの線《平面》)

②ボールを避けるための行動の支援

(鉄棒にぶら下がる《空間認知》

→ジャンプ《空中動作》)

③ボールの動きに対応した動き

(エリアを制限して回転の動きを引き出す。

《鉄棒を活用→ラインの線》)



② 教材・教具
「スリーヒントクイズ」
(国語)



効果的な教材・教具の活用 (認知の特性を踏まえた指導)

- ① 抽象的な問いから具体的な問いの意味がわかるように、絵カード等の教材を活用
(色、形、場所、使い方、働き、味、食べる時期、何の仲間、入っている物等のカテゴリーを示す。)
- ② 課題の焦点化と認知のしやすさを支援するホワイトボードの活用
(今何に注目するか、目線の高さ、手を伸ばせば届く距離で教材を提示)



③ 視覚化と構造化
「ハロウィンパーティーを
しよう」(生活単元学習)



視覚化と構造化を

(「わかる」「できる」ための必須ポイント)

- ① **視覚化**は、視覚優位の認知特性のある場合、必須の支援となる。その時、実物、写真、絵、シンボルマーク、文字等で、何が有効かを考えることが大切。(組み合わせも時には有効)
- ② **構造化**とは、今何をする時間か、次にどうなるのかなど、活動や世の中のことのしくみなどを、人に分かりやすく示す方法のこと。(国立障害者リハビリテーションセンター研修資料より)すなわち、見通しが持ちにくい認知特性のある場合、必須の支援となる。

(**場**の構造化、**意識の集中**の構造化、**時間**の構造化、**順序**の構造化、**回数**の構造化、**展開**の構造化等がある。)

2 知的障害と 自閉症を併せた知的障害 の児童生徒が共に学ぶ授業



いわゆる知的障害と 自閉性障害を併せた知的障害

- いわゆる知的障害と
自閉性障害を併せた知的障害は違う。
- 知的障害の児童には、**カウントアップ**方式。
- 自閉性障害を併せた知的障害の児童には、**カウントダウン**方式。



私の実際例から — 体育『サーキット運動』 —

- 知的障害学級 | 学級 | 担任
- 低学年から高学年まで在籍
- 知的障害と知的障害を有する自閉症が在籍
- 知的障害の児童には、**カウントアップ方式。**
- 自閉症圏の児童には、**カウントダウン方式。**



知的障害と自閉症圏の児童生徒の違い

知的障害



自閉症圏

アナログ

集団

動機付け

変化

デジタル

個別

結果

繰り返し



私の実際例から —算数『おもさくらべ』—

- 身近にある物の重さを比べる学習
- 自作教材の天秤を使って比べる
- 確かめるためにアナログの針の秤とデジタルの秤を使う。
- アナログ秤は知的障害、デジタル秤は自閉症圏の児童が強い。



授業の導入は、どうしたらいい？

知的障害



自閉症圏

興味関心を
引き付ける
動機付け
教材・教具

活動の見通
しがもてる
視覚認知で
きる教材の
提示



学習の環境は、どうしたらいい？

知的障害



自閉症圏

集団で協働
した活動
役割の分担
音楽や絵等
の活用

個別の活動
を保証
一人で活動
を完結
※構造化



指導計画や授業展開、どうしたらいい？

知的障害



自閉症圏

見通しが
もてるように
繰り返し
(時々揺さぶ
りやサプラ
イズも)

学習の手順を
明確にし、
ルーティン
な活動を。
変更には事前
の確認を



教材・教具の活用の観点で 「知的障害」と「自閉症圏」について

知的障害



自閉症圏

直感的な活用

単純な操作

複数で活用も可

見た目重視

手順を明確に

複雑な操作も可

個人で活用

操作性重視



3 まとめ

～個別最適な学びと
協働的学びの実現のために～



特別支援教育が大切にしている 授業づくりのポイント（長江）

- ①「わかる・できる」ためのプロセスを踏
まえたスモールステップの指導と評価
- ②「わかる・できる」ための教材・教具の
活用（提示の仕方等を含む）
- ③視覚化と構造化を生かした授業づくり
- ④学び合いのための人間関係づくり
（ソーシャルスキルを含む）



授業者の指導の意図と 学習者の活動との関係性

- 集団の指導において、課題をより**焦点化**することが大切。焦点がぼやけると、個の理解に差が出る。→課題の**焦点化**ができているなら、集団での学び合いは、児童生徒の実態に差があっても効果的に展開できる。
 - 集団の指導において、**構造化**（教室環境、板書、掲示等の視覚的教材、ICT機器の活用等）が適切になされていることが大切。
- 構造化**が適切になされているなら、集団での学び合いは、児童生徒の実態に差があっても効果的に展開できる。

教科の見方・考え方を踏まえる、 そして障害と認知の特性を踏まえる

- 学習指導要領の改訂によって、**教科の見方と考え方を踏まえた授業づくり**が求められている。
- そのため教科別の指導の形態が主流になる状況があるが、各教科等を合わせた指導の形態においても、**各教科の目標と内容を踏まえること**によって、合わせた指導のよさを生かした授業づくりができる。
- 当然ではあるが、**障害と認知の特性**を理解し、それを踏まえた授業づくりが、**個別最適な学びと協働的な学び**の実現となる。